

アン/ペア ～I Want
Your Love～

ENDLICHERI

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

逢うことは許されない。

それでも、限られた時間の中で・・・・・・・・互いの想いを重ね・・・・・・・・この呪縛から抜け出そう・・・・・・・・。

目次

第1節	いっだって・・・	1
第2節	コネクト	6
第3節	気づいたんだ	11
第4節	気づいてない	15
第5節	ペアになった日	20
第6節	不慣れな人付き合い	27
第7節	独り言	33
第8節	気づいたんだ	38
第9節	他人の事言えない	46
第10節	終わるWeekend	53
第11節	そばにいて	58

第12節 心など全焼したっていい
66

第1節 いつだって・・・

「少し、そばにいて……………」。

「……………」。

彼女の孤独を埋めるように、僕の肩に頭を乗せる彼女をそつと抱きしめた。これが、誰からも認められなくて許されないことだつて分かつてる。でも、僕がそうしたいから……………。

僕の両親は写真家だ。母は僕を授かった時に辞めてしまったけど、父は世界中を飛び回りながら世界の絶景を撮り納めていた。

でも、こんな両親には少し欠点がある。それは、芸術家あるあるだろうけど、かなりの変人だ……。学校に通っていた僕は両親から教え込まれてきた価値観が普通とは違うことを知り、両親の価値観をあまり信じられずにいた。

そんな両親は、ご近所関係もあまりよろしくない。と言っても、仲が悪いのは一世帯だけ。別のジャンルだけど芸術家の家だった。その家は、僕と同じ歳の子がいるらしいけど、互いの親のおかげで会って話したことはない。

最近の僕の父親は、僕に「写真家になれ」と一点張り。僕自身、写真は好きだ。でも、写真家になる気はない。今思い返せば、幼い頃からプレゼントは全部写真絡みだったな……。父は生粋の写真バカだから嫌でも僕に「写真家になれ」と言う。母は中立の立場を取ろうとするが、どちらかと言えば父側だ。こんな両親、呆れすぎて改善させる気にもならない。

「海斗！^{かいと}何度言ったら分かるんだ!？」

「分かるわけねえだろ！人の人生をなんだと思ってる!？」

「写真家になれば、色んな場所に行ける！上手な写真を撮れば——」

「上手くいったのはあなたの運が良かったただけだ！あなたの息子だからって上手く行くと思うか!？」

「やってみなければ分か——おい、どこに行く!?!まだ話は終わってないぞ!」

「……あなたと話したって、時間の無駄だ。」

「おい！海斗、待——」

居間にいれば必ず将来の話になる。それが嫌で、僕は自分の部屋に向かう。机と椅子、ベッドに本棚、それ以外は何もない殺風景な部屋。そんな中で存在を主張するのは机の上のパソコンとその上の段に置いてあるコピー機。両親が『好きなもの買ってあげ』って言ったから、デスクトップのパソコンとコピー機を買ってもらうことにした。

「はあ……。」

「まくた喧嘩して〜?ほんと飽きないよね〜?」

「……なんで海璃かいりはここにいるの?」

「それは海斗が心配だからだよ!」

「だからって俺の部屋にいる理由にはならないだろ?」

「テヘツ♪」

このテンションの高い人は僕の姉。名前は『海璃』。最近好きだった人が別の人の恋
人になり勝手に失恋したちよつと悲しくてちよつと痛い人。

「そうだ！明日、『C i R C L E』でライブあるんだ！来る？」

「それって、海璃が通ってるライブハウスだよね？・・・出るの？」

「出ない出ない！『蒼空』の状態がアレだから、あんまり出れないよ・・・」
「・・・へえ。」

『蒼空』って人が、海璃の初めて恋して初めて失恋した人。まだ仲良くはしているようだ
けど、当人のいない時にその名前を出すと悲しそうな顔をする。

「・・・気が向いたら行くよ。」

「やっぱり断るよ——って、来てくれるの!？」

「その代わり、海璃とは行かないから。」

「はいはい。じゃ、また後でね。」

僕は海璃からライブのチケットを貰い、海璃は嬉しそうに部屋から出ていった。それから椅子に座り、何もせずにポーツと部屋にいますと、意識はなくなっていた……。

第2節 コネクト

「……うっ、ん……うん……？」

眩しい。それが意識が起きた時に思ったことだった。目はまだ重たくて開けることはできない。でも、眩しいと感じさせる理由はなんとなく分かった。まず、体は机に伏せた状態ということ。その証拠に体のあちこちが痛い。次に、眩しい理由は窓から射してくる日差しだ。机の電気を着けた記憶はないし、カーテンを閉めた記憶もない。

「……やべ、寝てた……。」

机の上のパソコンを起動すれば、ネット小説の執筆ページが表示される。昨日の意識を失うまでの事をかなり思い出してきた。あの後パソコンを起こし、ネット小説を執筆

していた。

誰でも小説を書けるサイトを使って僕は小説家として密かに活動している。読者はいても2人か3人。たまに作品によるけど他の人にも人気の作品を書いたことがある。なんで人気になったのかは分からない。

そんな事は置いといて、僕は体を動かしてまずは風呂場に向かう。高校入ったらしよつちゆうこんな事してるから朝風呂(シャワーのみ)は慣れた。今日は休みだから慌ててシャワーを済ませる必要もない。

シャワーを浴び終えたら、再び自分の部屋に戻ってきた。小説のデータが飛ぶ前に保存をして、散歩に出かける準備をする。身支度を終わると、居間に行き、朝食を取る。両親は朝から仕事で出掛けているから、昨日の延長戦が起きることはない。

「ふあああ……あれ?今からご飯?」

「そういう海璃は今起きたの?」

「あはは。昨日徹夜しちゃってね。」

「へー。」

大して興味のないことだったから、さっさと朝食を済ませて外出する。海璃が眠そう

に「いつてらっしゃい」と言うから、小さめの声で「いつてきます」と言った。

散歩と言つても、決まった道は歩かない。気の向くままに歩いては、気に入った風景を写真に納める。そして、その風景を見ながらどんな物語が合うのかを考える。それが最近の趣味。

「……………今日はここだな。」

通つた公園で見た景色が綺麗に思えたから、その風景を写真に納めることにした。その時、偶然通りかかった人が写真を撮ろうとしていた事に気づいたのか慌てて画面外へ逃げた。僕は申し訳なく思い、その人に聞こえるように声を出して謝罪をする。

「あ、ごめんなさい……………!」

「あ、いえいえ……………?」

その人が画面外へ行ったことを確認して、写真を撮つた。その撮つた写真や目の前に広がる風景を見ながら、どんな物語が合うのか考え始める。周りの木々を写す綺麗な池の周りなら、きっと告白しているところ、かな……………?

「あゝ?」

「っ!」

「何を撮っていたんですか?」

「あ、ああ……この景色ですよ。」

「景色?」

「ええ。この景色を舞台にしたら、どんな物語があるのだろうか? そう思わせれるような景色だったので。」

「物語?」

「そう。人それぞれの物語があるように、どんな景色にもそれに合う物語がある。僕はそれが好きなんです。」

「へ、へえ……?」

オレンジ色のような髪色をした彼女は、のほほんとした雰囲気かきを醸し出しながら、僕を不思議そうに見ていた。僕からしたら、君の方が不思議感があるんだけど。……まあ、この頃は言えなかったけどね。

でも、この出会いが僕とその彼女の運命を変える「出逢い」だとは思わなかった。そ

してこの出逢いこそが『美剣海斗』と『広町七深』の運命を変える第一歩だったとは、この時の僕はまだ知らない……。

第3節 気づいたんだ

公園で偶然会った七深と、自分が書く小説のことを話していた。一応補足として言う
と、この時の僕はまだ七深の名前を知らない。

「恋愛系が多いんですね。」

「と言つても、妄想の中でしかないんだけどね……………」

「妄想？」

「そう。ご察しの通り、彼女いない歴^{イコール}年齢だから。そういう恋愛ストーリーも、自分の妄想の中の出来事だから。実際にカップルがその場所に行ったらどうなるかなんて分らないし。」

「そうなんだ……………」

彼女の雰囲気のせいか、色々話してしまっている。

「よろしければ、私が彼女になりましたどうか?」

「……あまりそういう事を言わない方がいいと思いますよ。自分を大事にしているように聞こえるから。」

「あはは、そうですね。」

ただ、若干つかみどころがない性格なのがなんとなく分かった。

「でも、16歳にもなるのにまだ彼女いないんですね?」

「余計なお世話です——うん?」

「?どうかしましたか?」

「僕、君に年齢伝えましたっけ?」

「えっ?……ああ、なんとなくですよ。なんとなく16歳っぽいなくって思っただけなので。あはは……。」

「そんな雰囲気出てます?」

「出てますよ!それじゃあまた!」

「あ、ちよつと待つて！名前教えてくれない？」

「えつ？えつと……な、『七深』です……」

「七深、さんか……」

慌てるように去つていった七深に、今までにない感情が生まれつつあつたのは、自覚があつた。家族や知り合いが去る時と彼女が去る時では気持ちがるで違つた。

両親の事情で、ある家族と接することを禁止された。その家族も芸術家だけど、方向性が違うとかで喧嘩してしまい、相手の家の同じ年の子とそのお姉さんとお話できなかった。

でも、幼い時に一瞬だけ同じ年の子を見たことがあった。お姉さんの方はその人の両親と一緒にいたから既に知っていた。同じ年の子は男の子だった。

それからしばらくすると、お姉さんの方が私に接するようになってきた。どうやらお姉さん『海璃』さんは互いの家族の関係がどうにも嫌らしく、私が一人でいるタイミングを見計らって私に会いに来て、色々お話していた。その時に、同じ年の男の子の名前が『海斗』くんだというのを知った。

「それにしても、こんなところで会うなんてね……………」

海璃さんとは話したことあるけど、海斗くんとは話したことがなかった。だから、さつき偶然会えて嬉しかった……………嬉しかったけど……………向こうは、私のことなんて知らないよね……………?

第4節 気づいてない

「ただいま。」

「おかえり。晩御飯はもうすぐできるから——」
「いらない。」

晩御飯の時間には父親がいる。話したくないから、嘘をついても逃げようとする。

「・・・・・・・・・・さてと。」

自分の部屋に入り、パソコンと向き合う。小説サイトを開いて、写真に合う物語を書き綴る。自分が撮った景色、その中にどんな感じの2人が合うのか?どんなシチュエーションが似合うのか?行き詰まった時はしんどいけど、この時間は好き。

「たっだいま〜！」

「ウザい。」

「うっ！さすが弟……鋭い切れ味だよ……！」

「よく飽きないよね？蒼空さんにフラれてからずっとやってるけど。」

「フラれてないって！りんこ燐子ちゃんに負けただけだから！」

「あつそ。」

この時間は嫌い。集中している時に爆音機が帰ってきたら書こうとしていた内容が飛んでイライラするから。

「今日はどんな写真撮ってきたの？」

「……これ。」

「うくん？……あ〜！あそこの公園ね！」

「そこで同い年の子と喋った。」

「凄いいじゃん！あんなに『話しかけるなオーラ』を放つ海斗に話しかけるなんて……」

その子、やりますな〜。」

「……言うんじゃないかった。」

「で、どんな子？」

「……『七深』っていう女子。なんかマイペースっぽい感じだった。」

「七深？ねえ、今『七深』って言った？」

「言っただけど……それが何？」

突然、海璃が黙った。何か考えているような困っているような感じで、少し嫌な予感がした。

「……ねえ、両親と喧嘩した芸術家の家族、覚えてる？」

「確か、俺と同じ年の子がいる家だろ？顔はあんまり覚えてないけど。」

「その家の子が、海斗が会った『七深』ちゃんだよ。」

「……はっ？」

珍しく真面目に話すと思えば、真面目とは思えない事を言われた。

「……いや、だとしたらなんで向こうは俺のことを知ってるんだ？俺は一度も会っ

たことないぞ?」

「確かにちやんと会ったことはないと思う。でも、向こうは互いの両親が会った時にあなたを見ていた。私はたまに彼女にこっそり会いに行つてただけど、七深ちゃんはあなたを一目見た時からずっとあなたを気になつていたらしいよ?」

「……………」

その後、勝手に彼女に会いに行つてたという海璃から七深のことを聞いた。苗字は『広町』で、マイペースな雰囲気を出しているのは彼女が才能があつて何をやらしてもほぼ完璧にできてしまうらしく、それを隠しているようだ。俗に言う『天才』つてやつだ。それよりも、僕は七深のことより七深に会いに行つていた海璃に対して驚きを覚えたんだが……………」

「そんな七深ちゃんに、全く知らないフリをしちやつたんだろ。」

「知らないんだから仕方がないでしょ……………」

「それで、どうするの?」

「どうするつて……………」

「これから七深ちゃんに会った時は、知らないフリをするの?」

「……その時考える。」

「またそう言つて。」

僕はパソコンに向き直して、小説を再び書き始めた。結局、七深のことが頭から離れず、書き終わるまでにかなり時間がかかってしまった。

第5節 ペアになつた日

七深と初めて話してから1週間が過ぎた。そんな今日は散歩ではなく、コンビニにいる。少し前からこれからの資金を集めようとバイトを始めたのだ。

「いらつしやいませー。」

「いらつしやいませ〜。」

「しやーせー。」

……上から僕、バイトの先輩の『今井^{いまい}リサ』さん、同じく先輩の『青葉^{あおば}モカ』さんだ。今井さんは見た目はちよつと絡みたくないイメージだったけど、話してみるととても接しやすくして色々教わってる。青葉さんも聞けば色々教えてくれるけど、ちよつと気を抜きすぎではないかと思う……。

「海斗くん、しばらくレジ任せていい？」

「はい、大丈夫ですよ。」

「おう、頼もしいですな。」

「モカもそれくらいしつかりしてよ？」

「あいあいさ。」

「あはは・・・。」

青葉さんのテンションにはついていけない気がする。ゆったりでマイペースな青葉さんに合わせられる人が世の中にいるのだろうか？そんな事を思ってしまう。

マイペースというワードを浮かべると、ふと七深を思い出してしまう。彼女はどのような気持ちで僕に話しかけてきたのだろうか？何故僕のことを気になつていたのであるか？そんな事を考えてしまうが、お客さんが来る気配がしたので、そんな考えは一度忘れて仕事をすることにした。

「いらつしやいませー。どうぞー。」

「お願いしま・・・す・・・す・・・。」

「お預かりしますね。」

お客様の言葉が途切れ途切れだったけど、それを考えるよりもお客様に迷惑をかけてはいけないと思い、素早く商品をレジに通す。つてか、この人ただけ食玩をかうのさ？1ケース買ってないか？

「・・・・・・・・合計で6828円です。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・お客様・・・・・・・・ま・・・・・・・・？」

コンビニでその額を見るのは初めてでちよつと戸惑っているが、何も反応がないお客様が気になって見ると、それ以上に戸惑うことがあった。それは・・・・・・・・。

「七深・・・・・・・・さん・・・・・・・・？」

「どうして・・・・・・・・海斗くんが・・・・・・・・？」

お客様が、ちよいちよい僕の頭をよぎる七深だったからだ。驚いた理由は対応して

いるお客さんが七深だったってのもあるけど、そんな七深が7000円も使って食玩を大人買いしていることに驚いてしまった。

「海斗くん？大丈夫……って、七深じゃん。」

「あ、リサ先輩。」

「何々？もしかして2人、知り合いだったの？」

「えっ？いや……。」

「まあ……知り合いっちゃ知り合いですね。」

「っ！」

「そっか。ちょうど休憩時間になりそうだから、ちよつと話してくる？」

「いや、働きますよ！」

「そお？それじゃあ、そのレジ終わったら休憩ね♪」

「あ、はい……。」

今井さんに言われるがままに、七深の分のレジを済ませたら休憩に入った。七深と2人でコンビニの前でジュースを飲みながら横に並ぶ。

「・・・・・・・・・・1週間ぶり、ですね。」

「そう、だね・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

会話が続かない。この前、七深のことを知らなければ何事もなく会話出来たのだから。・・・・・・・・・・いや、知っていなくても出来ていたか危ういけど。

こんな重たい空気は僕自身が嫌だったから、思い切って踏み込んでみた。

「・・・・・・・・・・七深さんって、美剣家と仲が悪い広町家の娘さんだったんだね。」

「っ！ど、どうしてそれを・・・・・・・・・・?」

「知ったのは半分偶然だよ。僕の姉の海璃が、僕の口から『七深』って名前を聞いた途端に色々教えてくれた。」

「そうなんですネ・・・・・・・・・・。」

「君は知ってたんでしょ？僕が仲の悪い相手の家の息子だって?」

「・・・・・・・・・・。」

無言でも、彼女は頷いた。思いつめて来る人がいないコンビニで、僕たちの周りだけがとても重たい雰囲気を作り出していた。

「もしかして、何か言われましたか……?」

「両親には話してないよ。話したくないし……。」

「えっ……?」

「だって会話すると……『写真家になれ』って言われるだけだし……。」

「……それだけ?」

「それを毎日言われてみなよ!嫌になって話す気無くなるから!」

「……ふふっ!」

「……うん?何かおかしいこと言った?」

「いえ……!海璃さんかた聞いてた通りだなくって。」

「そう?つてか、海璃からどんなこと聞かされてるの?」

「あ、気になります?」

「ちよつとはね。あの人なら色んなことを話しそうだから……。」

「ああ、確かに……。」

「……あ。あと、敬語は無しにしようよ。同い年なんだし。」

「う、うん。いいよ。でも……大丈夫かな……?」

「親同士のこと?」

「うん……」

「……親は親、子供は子供。親はどんなイメージを相手に持つていようが、僕たちには関係ない。僕たちは僕たちらしく接していこうよ。何かあったら僕が何とかする。だから、ね?」

「……うん、分かった。なんか、海斗くんにそう言われると安心するな。」

「そう?」

「うん!」

僕たちは互いの連絡先を交換した。そして、親には内緒の友好関係を築いた。正直、この関係がずっと続くとは思っていない。でも、こんなにも魅かれる七深との関係を簡単に断ち切られたくない。そう思い、バイトに戻った。

第6節 不慣れな人付き合い

七深と連絡先を交換したその夜、いつものように海璃が部屋に侵入してきた。

「どお、進捗は？」

「まあまあかな。．．．．．つて、また勝手に．．．。」

「いい加減慣れてよ。それに、私が聞いたのは小説のことじゃなくて七深ちゃんのとことなだけど？」

「だったら『進捗』なんて紛らわしい言い方するなよ。」

「それでどうなの、七深ちゃんとは？」

「そこまで気になる？」

「うん！」 キラキラ

呆れてため息すら出なかった僕は、七深とのことを素直に話した。途中ニヤニヤして海璃だけど、意外と真剣に聞いていた。

「……………つて感じ。」

「そう。良かった…………。」

「うん？」

「う、ううん！なんでもなく！そうと決まれば、これからは七深ちゃんとたくさんお話ししないとね？」

「僕たちと七深の家の関係、忘れてないよね？下手に派手に動けば互いの親がどんなバカ喧嘩するか分かんないんだから…………。」

「なんのために連絡先を交換したのよ？」

「……………あ、そういう事か。つて、誘えつてこと？」

「当つたり前よ！」

「ああ…………。」

シフト的に大丈夫かな…………？頭をよぎった心配事はそれだった。他にも考えることはあつたのに、それが先に浮かんでしまった。それだけ、七深と会うことが楽しみだつ

た………のかな……？

翌日、バイトが入っていたから連絡しなかった。……いや、ヘタレ過ぎて出来なかったのが一番の答えなのだろうが……。

「しゃーせー。」

「いらつしやいませ。……青葉さん、いい加減真面目に挨拶されては？」
「いやいや、これがモカちゃん你真面目な挨拶なんだよ。」

その口調で言われて信じられる人間がいるのだろうか？ いや、いないな。幼馴染がいるとは言っていたけど、その人たちは扱い慣れているんだろうな……。

「あれ？七深ちゃんだ。」

「えっ?」

「ど、どうも。」

「ど、どうも……。」

「……あ、海斗くん良かったら休憩入る?」

「えっ!? まだ休憩時間じゃないですよ!」

「その辺は気にしな。ごゆっくり。」

「ちよっ! ……あ、あのさ……。」

「は、はい……。」

「そ、外で話さない?」

この時の僕はとても分かりやすいほどに挙動不審だっただろう。急に七深が目の前に現れ、急に予想してなかった休憩に行かされて、どうしていいか分からなかった。分からなかったのにやった行動が『外で2人きりで話す』って、キザか!?

で、結局コンビニの外で2人共片手にジュースを持って会話するのであった。

「……。」

「……。」

いや、『会話』はしてなかった。終始無言の時間が続いた。

「・・・・・・・・・・そういえば、七深は色々出来る天才なんでしょ？」

「っ！」

「えっ？・・・・・・・・・・あ、この話はマズかった？」

「・・・・・・・・・・したく、なかった。」

「あ・・・・・・・・・・ごめん。」

「だって、バレたらみんな離れてくから・・・・・・・・・・話したくなかった・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「っ・・・・・・・・・・。」

「僕は気にしないよ。」

「えっ・・・・・・・・？」

「だって、有名アーティストの娘さんなんだから、何かずば抜けていることぐらい普通でしょ？それに比べて、僕は逃げてばっかだからそういう才能がないんだよね・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・ねえ。」

「うん？」

「もしも……もしも私が、バイオリン用の曲をバンド用にアレンジしたら、変かな……?」

「ううん、変じゃないよ。普通だと思う。」

「すらすら触ったことない楽器を弾けるのは?」

「普通でしょ?」

「あえて絵を下手法感じで書くのも?」

「……もしかして、全部七深が実際にやったの?」

「……。コクン」

「ここまで来ると『天才』とは何なのかを考えさせられるよね?」

「……じゃあ、普通っぽいことしてみる?」

「えっ……普通っぽいことって?」

「その……一緒に出掛ける、とか……?」

この流れで誘えた僕は『天才』というより『めっちゃキザ』だと思う。今なんか絶対に誘えないもん……。

第7節 独り言

私は一人でいる時、口のにやけが止まらなかつたと思う。形がどうであれ、海斗くんから誘ってくれたことが嬉しかった。頑張つてモニカのみんなの前ではいつも通りにしてたけど、出かける前日となった今は、嬉しいのと緊張が同時に押し寄せてきて、どうにかなくてしまいそうだった。

「おはよ〜。．．．ちよつと普通すぎるかな？遅れちゃつてごめんね〜。．．．待ち合わせ時間にはいる気がするしな．．．」

傍から見たらただの変な人だと思う。壁に向かって言ってる自分自身がそう言うんだから、絶対変な人だと思う。どれだけ壁打ちしたら、正解が見えるのだろうか．．．？

「はあ……。」

考えても答えは見つからない。明日着ていく服は決まったから、会った時の言葉は当日考えることにして私は眠ることにした。きつと、明日にはその答えが見つかってると信じて……。

七深を誘ってから早くも一週間が経った。互いの予定を考えて来週の土曜日になつたけど、心の方はちよつと落ち着かない。そもそも、女の子と一緒に出掛けたのなんて一度もない。……あ、海璃とは何回かあったわ。かなり昔に。でも、その時の記憶なんてあまり覚えてない。

「お、お待たせ……。」

「いや、そんなに待ってない、よ……。」

七深の私服は見たことあったけど、その時とは少し違って全身白のワンピースに黒色のベルトを身に着けた少し清楚なイメージだった。

「へ、変かな～・・・.?」

「い、いや・・・変じゃないよ。普通に可愛いよ。」

「そ、そう～?なら良かった。」

「それじゃ、行こっか?」

「うん。」

僕たちは気ままに散歩をするかのように歩き始めた。

「ねえ、ななみちゃんたちは?」

「えっと……あれ? いない……。」

「えっ!! ……あ、あそこ!」

「もう歩き始めてる!」

「行くよ! シロ、ふーすけ!」

「うん!」

「ええ……?」

始まりは昨日の夜、突然透子ちゃんから連絡が来た。内容は、『最近ななみの様子がおかしい。今度の土曜に出掛けるとか呟いてたから追いかけてみよう!』だった。この内容をななみちゃん以外のモニカ全員に送ったらしく、言うまでもないけどるいさんには『断る』という既読スルーだったんだって。でも、つくしちゃんは了承したみたいで、私はやや強制だった……。

「それより、ななみちゃんの隣にいる人は誰だろう?」

「分かんね。もしかして、ななみの彼氏だったりして?」

「そ、そうかな……? つか、こんなのバレたらななみちゃん怒るよ? 帰ろうよ……。」

「何言ってるんのシロ! 最近ななみの様子がおかしかったのは知ってるでしょ?」

「それとこのお出かけ、関係あるかな・・・？」

「あるって！」

「ましろちゃんだつて、尊くんとデートの約束するとそわそわしたりして居るでしょ？」

「そ、それは言わないで〜！」

「つてことで、モニカ2人目のリア充になるか、あたしたちで確かめるよ！」

「おぉ〜！」

なんでつくしちゃんまでノリノリなんだろう・・・・・・？

第8節 気づいたんだ

透子ちゃんをつくしちゃんと私の3人でななみちゃんを追いかけると、色んなところへ寄り道しながらどこかへ向かっているようだった。

「あの2人って、ほんとうに付き合ってるのかな？」

「うーん、あたしとしては付き合ってるようには見えないな。」

「なんか、互いに遠慮している感じだよな？」

「タケルと初めて会った頃のシロみたいだな？」

「そ、それは言わないでよ……！」

何か言えば必ずと言っていいほどに私がかからかわれる。もう、お家に帰りたい……。うち

「あ、あのカフェに入っていったよ。」

「あたしらも行こ！ついでにちよつと休憩しよ！」

『休憩』が本音なんじゃ・・・？」

『ななみちゃんを見逃さない』という程で私たちも休憩することになった。

さつきからずっと気になってる、僕たちの後をずっとつけている3人組がいることを。意外と鋭い（と思う）七深は気付いてるのだろうか？

「すみませ〜ん。これくださ〜い。」

全く気にしてない感じで注文してるし・・・。もしかして、本当に気付いてないのか？

「お客様？」

「あ、はい。えっと……じゃあ、これを。」

「かしこまりました。」

「海斗くんって、意外と甘党？」

「ううん、コーヒーも飲めるよ。でも、ここに来たら必ずというほどこれを頼むんだ。」
「そうなんだ……。」

七深が頼んだのはアイスコーヒーで、僕が頼んだのは『チョコリスタ』というドリンク。これに『エスプレッソショット』を追加して飲むのが一番美味しい飲み方だと僕は思ってる。

「ところで、もしかして気付いてる？」

「えっ、何を？」

もしかしたら、ずっと後をつけている3人組のことを言っているのかと思った。でも、もしも違ったらという考えがあつたから、あえて知らないふりをした。

すると、七深は唐突にスマホを取り出して文字を打ち始めた。誰かにメールするのだろうかと思つたら、おもむろにスマホの画面を僕に見せてきた。

『私たちの後をつけてる3人のこと、気付いてないの?』

見せてきた画面にはメールアプリを起動してその言葉が書かれていた。僕もスマホを取り出して、メールアプリを起こして文字を打って七深に見せた。

『いつから気付いていたの?』

『合流した時ぐらいかな?』

この文を見て少しだけ驚いた。僕が気付いたのは2軒目の店を出た後ぐらいだった。でも、それより前に七深は気付いていた。天才つてそんなもんなのか?

『でも、気付いてないふりして。私の友達だから。』

文字を打とうとしたけど、打ち終わる前に七深が先に文字を打ち終えて見せてきた。

これはこれで驚いたけど……まさかの七深の友達が僕たちの後をつけていたのか……。

『ちなみに、どういう友達なの？』

『バンド仲間って言うのかな？ Morfonicaってバンド名と一緒にバンドやってるんだ。』

『七深、バンドやってるんだ。楽器は何やってるの？』

『私はベースだよ。』

『ベース？なんで？』

『面白そうだったから。それに、しろちゃんたちはもう担当決まってたし。』

バンドの担当ってそんな感じで決めるものなのか？バンドなんて全く関係ない世界だったから、全然知識がない……。

「お待たせしました。アイスコーヒーとチョコリスタでございます。」

「は〜い。」

「ありがとうございます。」

「では、ごゆっくり。」

頼んだ物が届いて、僕たちは一口飲む。チョコの甘さの中に、エスプレッソシヨットの苦みが少し混ざっていて美味しい。ただ、これが夏限定っていうのがちよつと残念な部分だ……。

「そつちも美味しそうだな。」

「飲んでみる？」

「えっ、いいの……？」

「うん、気に入るかどうか分からないけど、どうぞ。」

「ありがとう。……あ。」

「うん？」

「ちよつと待つて……。」

飲もうとした時、突然七深が席を外した。すぐに帰ってきたけど、手には新しいストローがあった。

「うん?・・・あ。ごめん・・・。」

「ううん、気にしないで・・・!いただきます。」

年頃の女の子に男が口をつけたストローから飲めっていうのは酷かったな・・・。場合によってはセクハラで訴えられるだろうし・・・。

「・・・うん、甘い・・・。でも、美味しいかも・・・。」

「そう?それなら良かった。」

それから2人でのんびりくつろいだ後、店を後にした。出る時に他のお客さんのテーブルの上をちらっと見たけど、苦めのコーヒーを頼んでる人がたくさんいたことに一瞬疑問を覚えたけど、あまり気にしないことにした。

甘すぎた……。普段あまり飲まないコーヒーが普通に飲めるぐらい甘かった……。

「今日は一段とコーヒーが美味しい！」

「私も、しばらく甘いのはいらないかも……。」

「私も……。」

恋人でもないのにあれだけ甘い雰囲気を作れるって、ほんとうにあの2人はどういう関係なんだろう……？

「シロもタケルとあれぐらい甘々な雰囲気出してくれよう？」

「だから、なんで私に言うの……?!？」

もう、ほんとに泣きそう。今だけは透子ちゃんから逃げたい……。

第9節 他人の事言えない

「そういえば、さっきななみちゃんたちはなんでスマホを見せあつてたんだろう?」

「なんか面白い動画でも見つけたとか?」

「そんな透子ちゃんじゃないんだから。」

「ふーすけ、言うね・・・!」

別の場所に向かうななみちゃんたちを尾行する私たち。ななみちゃんたちの会話が聞こえない距離にいるから、どんな会話をしているのか分からないから、2人がどういう関係なのか分からない。

「やっぱ、あたしからしたらあの2人、恋人だと思っただよなく?」

「でも、恋人だとしたらもうちよつと距離が近かったりするよね?」

「私も、つくしちゃんと同じ……。」

「シロまでく!?もおく我慢の限界!直接聞いてみよ!」

「ダメだよ、透子ちゃん!そもそも」2人を追いかけてみよう」なんて言ったの、透子ちゃんなんだよ!」

「それに、ななみちゃんたちの邪魔をしちゃダメだよ……!」

気付かれないように尾行する前に、暴れる透子ちゃんを抑える方で力を使ってしまう私たち。もう休みたくなった……。

僕たちの後をつけてくる3人組、一体何をしているのだろうか……?

「それより、どこに向かっているの……?」

「学生なら普通に何度も通う場所。」

「普通〜!」

．．．．．やっぱり、七深は一癖ある娘だな。「普通」という言葉に過敏に反応する。まあ、あの家に居れば普通の生活は送れないよな．．．。

「それでそれで、どこなの〜?」

「ここだよ。」

「?ここって．．．．．?」

「ゲームセンター。『ゲーセン』って言った方が分かりやすいかな?」

「ゲーセン．．．．．初めて来たよ．．．．．」

「そうなんだ．．．．．と言っても、僕もそんなに来てないけどね。」

「そうなの?」

「最後に来たのは．．．．．中2の時に海璃と来た時かな?」

「海璃さんと来たんだ．．．．．」

「でも、振り回されっぱなしだったから楽しめなかったけどね。」

「あはは．．．。」

「つてことで、今回はちゃんと七深を楽しませながら楽しむことにするよ。」

「……うん！」

よくよく考えてみれば、僕も海璃と一緒に行った一回きりだから、他人ひとの事言えないな……。

ゲームセンターに入ると、まず僕たちを迎えてくれたのはUFOキャッチャー。お菓子もあればぬいぐるみもあり、ヲタク向けともいえる人形まで景品として置いてある。

「おお～！たくさんある～！」

「ま、ゲーセンが初めてならUFOキャッチャーも初めてだよね……。」

「お菓子まで置いてある～。」

「お金を入れて、あの中の物を穴の中に落とせばゲットってゲーム。ほら、あんな感じに。」

他のUFOキャッチャーでプレイしている人たちを見つけたから、例えとしてそれを見せる。ちょうどいいことに、成功と失敗の両方を見せることが出来た。

「やってみる？」

「うん！えつとね……あれがいろいろ！」

「あれ？……って、デカ……。」

七深が指さしたのは、『ごろねこ』とかいう大きいねこのぬいぐるみ？クッション？そんなの。海璃と来た時はお菓子だったけど、あれは初めてだ……。

「……ま、まあ、やってみるのはいいことだと思うよ……。」

「行くよ。」

「つてもうやってるし……。」

UFOキャッチャー完全初心者の七深のプレイ。結果は言うまでもなく失敗に終わった。こんな大きいクッションなんて取れる人いるのか……？

「ああ……。」

「まあ最初はそんな感じだった……あ、コツが書いてある。」

「コツ？……ほんとだ……。」

取らせる気があるのかないのか分からないけど、『取り方のコツ』みたいなのが書かれた紙が機体に貼り付けてあった。それを見た七深は……。

「……………」

再びUFOキャッチャーに投資した。そんなに欲しいんですか……？

「……………」

「……………」

たかがゲームなのに、僕と七深に緊張感が走る。紙に書かれた通りにアームを景品に引っかけて、景品は……。

穴の中に落ちた。

「……………取れた。」

「……………?でしょ……………」

「取れたよ、海斗くん！」

「う、うん……………」

この時、僕は改めて七深が天才だつてことを実感した。1回目はノーヒントで失敗、2回目はヒントを見て成功。これぐらいのクツションを2回で取れたとなると、何千円と投資して苦労の末にゲットしてきた人たち・ゲットしてない人たちが可哀想に思えてくる……………。

「君の名前は『によちお』だよ。」

「ちよつと待つて。その名前はマズい。」

第10節 終わるWeekend

それから僕たちはゲームセンターを楽しんだ。レーシングゲームで対決したり、エアホッケーをしたりした。それに少しメダルゲームを遊んだ。中でもメダルを使ったシューティングゲームが一番盛り上がった……気がする。

でも、一番時間かけて遊んだのは『プリクラ』、かな……？ 『時間かけて遊んだ』は語弊があるかな？ 互いにプリクラが初めてだったから、結構苦戦しました……。

「ね、ねえ……これ、やってみない？」

「これ？ これって……プリクラ？」

「うん……。」

「ああ……やって、みよっか……？」

七深がやってみたって言うからプリクラに入ってみたけど……。

「これ、何……？どれをどう操作したらいいの……？」

「か、海斗くん……？」

「ちよ、ちよつと待ってね……！」

……なんて事をしてました……。どっからどう見ても普通のおじさんが間違えてプリクラに入ってしまったって帰れなくなってしまったみたいなの展開になってました……。

「♪」

「……そんなプリクラでいいの？」

「うん、これぐらいが普通だと思うから。」

帰り道だけど、写り映えの悪そうな写真を見てちよつと嬉しそうにしている七深だった。僕はその写真を見る度に若干申し訳ないと思ってしまう。

「海斗。」

「うん? …… 親父 ……」

「そちらの子は …… まさか、あの家の娘ではないのか?」

「か、海斗くん ……」

楽しい時間つてのは一瞬で終わるようだ。面倒くさい親父とぼつたり遭つてしまつた……。七深はとて不安そうにしてるけど、僕は覚悟を決めて親父に言いたいことを言うことにした。

「…… 悪いけど、俺たちと親父たちは違う。」

「ふざけるな!」

「…… 七深、ごめん。今日はこの辺にしよつか? さよなら。」

「えつ、ちよつと ……」

「海斗、待ちなさい!」

「…… 七深、本当にごめん。」

僕は七深と雑な別れをして、親父を置いて家に帰る。

「はあく、楽しかった〜！」

「つて、そんな事言ってる場合じゃないよ！」

「2人とも、なんか変な感じだったね。」

「あの人、男性のお父さんなのかな・・・？」

「そうなんじゃね？」

「透子ちゃん、もう完全に飽きてるよね・・・。」

でも、ななみちゃんの雰囲気からしていい感じのさよならの仕方じゃないよね・・・？
悪い雰囲気な気がするよね・・・？

「・・・で、結局ななみちゃんと一緒にいた人って誰だろう？」

「わかんね。」

「つくしちゃん、透子ちゃんに聞かない方がいいと思うよ・・・。」

ななみちゃん、ちよつと心配だな・・・。

第11節 そばにいて

あれから海斗くんとは一度も会ってない。連絡さえも……。メッセージアプリでメッセージを送っても数日経って既読が付くだけで返信は返ってこない。あれが完全の別れではないのは分かったけど、返信が来ないのは寂しい。

「……………はあ。しろちゃんも、こんな感じの時があつたのかな……………」

既読しか返ってこないトーク画面で『会いたい』と送ろうとしたけど、この流れだと数日したら既読が付くだけだろうから送るのは辞めた。前にしろちゃんが尊くんのこととで悩んでいた時もこんな感じだったのかなと思ってしまった。私の場合は海斗くんに恋してないのに……………恋して……………恋……………してない、はず……………。

でも、やっぱり海斗くと会えないのがよっぽど辛いのが分かってしまう。夢の中に海斗くんが出てきてしまった。夢の中で出会えたって、現実は何も変わりはないのに……。

「それって、やっぱりなみはその人に恋してんじやねーの？」

「えっ……。そ、そうなのかな……。」

「そーだって！リサさんやひまりさんから聞いたから！」

「それは参考にならないでしょ？」

「ちよつとルイ〜!？」

「でも、るいさんの言うことは分かるな……。」

「じゃあシロが判断しろよ〜！」

「えっ、いや、ちよつと……。」

「あははは……。」

やっぱり、モニカといるとちよつとでも海斗くんとのことを一瞬ぐらいは忘れられた。でも、自分の手に残った、プリクラの時に握った彼の手の感触をふと思い出してし

まうけど、決して私たちが報われることはないんだと思つてしまう……。

「はあ……。ほんとうに恋してるのかな……。？。」

もしも恋をしているのなら、それは絶対に叶わない恋になるのは分かつている。互いの家同士、仲がとても悪いから互いの両親は私たちが結ばれることはない。そう思つてしまうから、その部分だけは光が消えてしまったみたい。何か虚しさを感じてしまったよう……。

「七深。」

「っ！。」

ふと聞こえてきたのは、少し前に聞いてた声。

夢の中で何度も聞いた声。

私を普通から離れさせた悩みの原因の人の声。

同じ境遇にいるのにその運命さだめを絶ちきろうとしている人の声。

私が一番逢いたくて、今は会いたくない人の声。

「……………おやおや、海斗くんじゃ〜ん。久しぶり〜。」

「……………うん、久しぶり。」

私は今まで通りのテンションで返した。溢れ出る感情を隠して……………。

久しぶりに会った七深は、変わらなかつた。いや、変わらない姿を見せているのだから。声をかけた時、彼女は辛そうな顔をしていたからだ。僕は七深を連れて近くの公園へ行き、ベンチに座った。

「はい、これ。」

「ありがとう。」

近くの自販機で買った缶コーヒーを1缶、彼女に渡した。「ぷはー」と気の緩むようなことを言っているけど、僕は無理しているようにしか見えなかった。

「そういえば、最近なんかつれないね〜?」

「えっ?」

「だって、私の送ったメッセージ全部既読スルーしてたでしょ? どうかしちやったのかと思つたよ〜。」

「……………まあ、色々あつてね。七深にも関係あると思うけど。」

「私にも?」

普段通りに会話されるおかげで、七深の心が見れない。でも、それでも僕は重要な話をする。

「……………七深、一緒に家を出よう。出て、二人で過きゆごさない?」

「そ、それつて……………告白……………?」

「そう捉えてもいい。互いに窮屈きゆうくつな家に居るんだ。僕たちは僕たちらしい、新しい生活を送りたい。」

「……………」

「……………別に強制しているわけじゃない。両親の下を離れるんだから、それなりの覚悟が必要だから。」

「ちよつと、考えさせて……………」

そうやって七深は俯いた。しばらくすると、七深は口を開いた。

「……………出来れば、それはしたくない……………」

「……………」

「今、やつと気付いたの。私は海斗くんに惹かれていることに。でも、実の家族と離れるのは嫌だよ……………」

「……………そっか。変なこと言っでごめん。」

「じゃあ、一つお願いさせて。」

「いゝよ。」

「少し、そばにいて……………」

「……………どうぞ。」

僕は彼女の肩を抱き寄せた。彼女は僕の肩に頭を乗せてきた。無意識のうちに作ってしまった彼女の孤独を埋めるために……。

「や~~~~~~~~つとくつついたわね〜！」

「えっ? ……うわあ!? お、お母さん! ……えっ???’」

10秒ぐらいたら、僕の母が突然話しかけてきた。そして、横には（七深の反応からして）七深のお母さんもいた。

「ごめんね。お父さんたちには内緒で、あなたたちにはくつついてほしいと思って見守っていたのよ。」

「はっ?」

「お宅の息子さん、素敵なプロポーズをするのね? 『一緒に住もう』だなんて?」

ヤニヤ

「そちらの娘さんだつて、さりげなく『好きです』アピールするなんて、なかなかの実力ですよ。」

「お、お母さん………?」

「親父たちの意見は………?」

「ああ〜! あんなアホ共——」

「反対しようもんなら——」

「真つ先に捻り潰してあげるわよ?」

「あ、あはは………。」

翌日、僕たちは親父たちから謝罪を受け、堂々と家族間交流が出来るようになった。そして、僕と七深は互いの気持ち偶然(だと思いたいけど)知ってしまい、正式に付き合うことになった。

どっちの母も、怖かった……。

第12節 心など全焼したっていい

今日は学校もバイトもお休み。なんか気分転換がしたくなって河原にレジャーシートを敷いて寝転がっている。

「ふわあ〜……………」。

お日柄も良く、絶好の昼寝日和だから、睡魔に襲われてきた。家のことで悩むことがなくなっただから、ずいぶん肩の荷物が軽くなった。天気と気持ちのおかげで眠りにつこうとしていた。

「こんなところでお昼寝ですか〜?」

「……………なんだ、七深か。」

「『七深か』じゃないですよ。あなたの恋人が来てるのに何を寝ようとしているのかな？」

「眠気にはあまり勝てない人間なのでねー。」

「ふん。」

僕の顔を覗いてきたのは、あの一件の後に互いの気持ちを知り恋人関係になった広町七深だった。頭上から立ったまま僕を覗いてくる七深の顔はニヤニヤしていた。ただ、僕としてはここで一つ問題が起きる。

「……………ねえ七深。一ついい？」

「何？」

「僕は悪くないと思うんだけど……………見えるよ？」

「えっ？……………っ！」／／／

その一言で察してくれたのか、七深の服ワンピースの裾すそを押さえながら七深は少し下がってくれた。

「み、見た……?」／＼

「『見た』とは言っていないよ。『見えるよ』と言っただけ。」

「あつ……そ、そっかく。」

「そうそう。早とちりもそこそこにしなよー。」

正直、七深のワンピースの中を見てしまった。まあ……俗に言う『下着』つてものをね。でも、正直に『見た』って言ったら絶対に怒ると思った。だから、保険として先に『見える』と言っておいた。保険が上手く効いてくれて良かったよ……。

「見たとしても怒らないのに……。」

「えっ?何か言った?」

「なんでもありません。」

「なら、いいけど——って、ちよつと何?」

「横に座らせて。」

「あ、はい。すみません。」

ちよつと声色が変わった七深は僕を少しどかしてレジヤーシートに座った。

「……ちなみに、これって普通のこと〜?」

「うーん……普通ではないかな〜?」

「そ、そうなんだ……。」

「だって、普通高校生がこんなところで昼寝なんてしないでしょ?」

「それも……そうだね。」

そう言いながら、七深は仰向けになった。ボソツと何か言ったり、声色を変えたりと、今日の七深はちよつと何考えているのか分からない。……あ、前からそんな感じだったっけ?

「ねえ、海斗くん。」

「はい?」

「私たちって……こ、恋人、なんだよね……?」

「まあ……互いの認識があつていけば。」

「だよね〜。」

「う、うん……。」

「……あ、あのね！私、色々覚悟はしているんだよ……！」
「うん？う、うん……うん!?」

顔を赤くして何かモジモジしながら言ってくる七深に、僕はどういう理由で言ってきたのか理解してしまつてちよつと動悸が……。

「な、七深さん……!?」

「っ……！」
／／

「はあ……。七深、ひとまず落ち着こう。まず、ここは外だよ。そしてね、どこでそんな情報を手に入れたのか分からないけど、僕が一応男だからつてすぐさまそういうのするわけではないんですよ。」

「えっ、そうなの……?」

「男は基本狼だけど、全員が全員狼ではないんですよ。」

「そうなんだね……じゃあ、全く興味ないの?」

「ねえ、なんでそんな極端な考えしかないの?全く興味がないわけじゃないから。」

「へ、へえ……。」

お嬢様学校にいる人間はそれを知る機会がかなり少ないとしても、知ったら知ったでなんでこんなにふざけた考えに走つちやうんだらうか・・・？

「・・・悪いけど、僕はかなりマイペースだから、どうしても言うなら僕のことを急かしてくれ。」

「・・・ふふっ。」

「なんで笑うの？」

「ちよつと変だな〜つて思つて・・・。」

「そう?。」

僕の考え・・・というか性格が分かつてくれたのか、いつものテンションに戻つた。このペースでのんびり歩いていこうと思つている。でも、七深相手だと色々苦労しただけ、まあおんきに向き合つていこうと思つている。

「じゃ、おやすみ〜。」

「海斗く〜ん?。」

まあ、分かりやすく言えば七深相手なら心さえも全焼したつてもいいと……今
は思ってる。